

公共空間における非言語コミュニケーションとしての

「ケータイのディスプレイを見る行為」

'Looking at "Keitai" (Mobile Phone) Displays' as a Form of Non-Verbal Behavior
in Public Spaces中村隆志(なかむらたかし・Takashi Nakamura)¹・大江宏子(おおえひろこ・Hiroko Oe)²¹新潟大学人文学部 准教授・²横浜国立大学経営学部 教授

[Abstract]

This study investigates "looking at 'keitai' (mobile phone) displays," a behavior that has become common in public spaces. To understand this behavior, the authors administered a questionnaire to over 500 persons (keitai users) in Japan with support of a research agent (goo Research). Statistical analysis indicates that keitai users utilized "looking at keitai displays" as a nonverbal behavior referring to environmental situations. It also suggests that older persons also used keitai as nonverbal behavior like younger ones, and that females required keitai in certain situations. These results suggest that "looking at 'keitai' (mobile phone) displays" is used as nonverbal communication in public spaces.

[キーワード]

ケータイ、非言語行動、非言語コミュニケーション、ゴフマン、公共空間

1. はじめに

21世紀の00年代において、駅、街路、公園などの公共空間を往く際に目につくのは、ケータイ(携帯電話、PHSを総称する)のディスプレイを見る人たちの姿である。ユビキタスな通信が可能となり、ほとんどの人がケータイを持ち歩く現在、実に多くの場面で、「ケータイのディスプレイを見る行為」を見かけるようになった。公共空間の情景は、ケータイ出現以前のそれと比べれば、決定的に変化したと言える。

ケータイのディスプレイを見る人の姿から、周囲に対して無関心な態度であると感じる読者も居るだろう。多くの人がこの行為を行うことから、閉鎖的な印象を覚えて、コミュニケーションが希薄化してゆく現代を憂い、ケータイというメディアを問題視する言説は数多い[例えば、1]。しかし、ケータイのディスプレイを見ている者が、その姿が閉鎖的な印象を与えるとわかっていて、あえて意図的に行っているとするならば、見たままの印象だけでは、現実を語ることはならない。その行為を行っている者が、どういう状況におかれて、何を考えたのが問題となる。ケータイのディスプレイを取り出す契機をユーザに問いかけて、その傾向を知らなければ、公共空間でケータイのディスプレイを見る人が大量に居る現代を理解することには結びつかないと思う。

著者らはこれまで、ケータイのディスプレイを見る行為に注目し、それが日常的な空間の中で非言語コミュニケーション(注1)として作用していることを指摘してきた。文献[2]において、多くのケータイのユーザ達が、ケータイのディスプレイを見る行為を見かけた際にその相手に話しかけにくい印象を受けている一方で、その効果を自ら意図的に用いて、周囲から話しかけにくい状況を作る場合があることを示した。彼(女)らは、ケータイのディスプレイを見る行為を行うことによって、日常的な空間の中で生ずる気まずい状態を回避しようとしていた。また、文献[3]では、ユーザ達が公共空間でケータイのディスプレイを見る行為を用いる際には、自らの社会性や人間関係をアピールする(このことを、著者らは「多重文脈性をまとう」と呼ぶ)ために利用することがあることを指摘した。彼(女)らは、自らが座する空間の状況に応じて、ケータイのディスプレイを見る行為を行う傾向にあった。ケータイは、周囲に向けて、無言で自らの態度を表明するためにも用いられている。

上記の論考では、大学(院)生を対象とした調査を行い、自由記述の回答を精査する方法を用いて、ケータイのディスプレイを見る行為を理解するフレームワークを立案してきた。本稿では、これまでのケーススタディを基に、調査規模を拡大し、客観的な質問の量を増やして調査を行った。一人で公共空間に居る場面を大きく3つに

わけ、その状況でのケータイ利用を調査結果から考察する。また、被験者の属性(年代、男女別)による使用傾向の違いを指摘する。また、ユビキタスな通信環境が整備された社会の中で、ケータイのディスプレイを見る人が多く居る事態を起点として、公共空間について改めて見つめ直す視座を本稿は提示する。

2. ユビキタス社会、モバイル社会における公共空間

ケータイは1990年代に爆発的に普及した[4]が、当時は音声通話が主な機能であったことも手伝って、公共空間における通話マナーが大きな社会問題となった。ケータイ利用の先駆者であったビジネスマンや当時の若い世代のユーザが、強く批判にさらされた[5]。通話マナーのための啓蒙運動が多く展開する一方で、90年代晩年の1999年、NTTドコモによるiモードサービスが開始された。このサービスにより、ケータイによる電子メール利用が広く普及することになり、ケータイの利用傾向は、通話からメールに大きくシフトする。2008年の段階でも、ユーザがケータイに最も求めているのはメール機能である[6-7]。遠隔コミュニケーション機能だけを比べても、ケータイはメールで利用されることが多く、必然的にディスプレイを目で見て利用されることが多い。

さらに、2006年10月にナンバーポータビリティ制度(MNP)の導入が行われ[8]、この時期を前後して、各ケータイキャリア間のサービス提供競争が一気に加速した(3.5世代ケータイ端末の投入と搭載率の向上、キャリア提供のポータルサイトの整備充実、無料コンテンツや定額制コンテンツの拡充、地図や動画などの大容量コンテンツや無料コンテンツの増加、検索エンジンの拡充、ワンセグ機能搭載率の増加、ICカード搭載率の増加など)。顧客の囲い込みを懸けて、ケータイキャリアやコンテンツプロバイダが提供するサービスは、それまで以上に充実したものになり、様々な快適さ、便利さ、楽しさが提供されている。多くのユーザにとって、公共空間に居るかどうかを問わず、ケータイのディスプレイを見る頻度は今後も増えていくと予想される。

ケータイのディスプレイを見る行為は、一部の例外(歩行中のディスプレイ凝視や照明をおとしたイベント会場における液晶装置の光の散乱など)を除き、一般に迷惑行為ではない。周囲への迷惑行為とならないことが一因となって、この行為が公共空間で広く普及することが可能だったとも考えられる。ケータイのディスプレイを見る行為は、身体を動かして為されるため、その意図の有無に関わらず、何らかのメッセージを必然的に周囲に発することになる[9]。2009年現在、公共空間でケータイのディスプレイを見ている人は多く、この行為を通じた非言語的なコミュニケーションが頻繁に起こり続けていると言って良い。この現象は、ケータイの普及がもたらしたユビキタス社会、モバイル社会と謂われる社会モデルのひとつの側面を表しているのではないだろうか。今、目の前にいる人が、ふと自分のケータイを取り出してディスプレイを見る、ということが当たり前のように頻繁に行われている現在、このコミュニケーションの実態を明らかにしていく必要があると考える。

3. 公共空間で3つの用法

著者らは、一人で公共空間にいる際に、連絡すべき用件があるわけでも、着信があるわけでも、すぐに見たいネットのコンテンツがあるわけでもないにも関わらず、ケータイを取り出すことを「用もないのにケータイを取り出す」と記述する[3]。「用もないのにケータイを取り出す」行為を一人で公共空間で行う場合、その用法として、大きく分けて2つに分けられ、その内の1つをさらに2つに細分できることを文献[3]で指摘した。これら計3つの用法は、それぞれ、

- 用法a: 暇つぶしのため、
- 用法b: 周囲との干渉を避けるため、
- 用法c: 多重文脈性をまとめるため、

に分類可能である。この3つの用法は、それぞれに実現する目的が異なる。

aの暇つぶしとbの周囲の干渉からの逃避の使い方は、従来から在る新聞、雑誌、手帳、時計、たばこ、ゲーム機などの「携帯」可能な小物でも行われてきた行為であり、その機能がケータイで代用されている、と見て良い。aでの使い方は、自らの感興が主な目的であり、周囲からの視線やそれらの人々に与える印象を意識するよりは、空き時間を如何に充足するかが念頭にある。

一方、bの使い方は、周囲と干渉をする意向が自分にはないことを、無言で演出するためにケータイを用いている。つまり、周囲の人との会話や関係作りに消極的である、というよりは、「周囲の人達と相互作用を行わない」ことに積極的なのであり、その積極性を実現するためにケータイを用いている。このような方法は、その場に居なくてすむなら居たくない、つまり身体の不在あるいは透明化を志向する利用法でもあるとも言えるだろう。

cの用法は、aやbの場合と異なり、ケータイが携帯可能で即時性のある双方向の通信機であることが実現する用法であり、その場に居ない人とやりとりすること、あるいはやりとりする可能性があること自体を周囲に見せることで、自らが社会性や人間関係を持つ存在であることを演出する働きがある。つまり、他の人とつながっているが、自分が今居る空間に存在していることを周囲の特定の人、不特定の人に強くアピールする。多重文脈性とは、現時点で座する空間の文脈の影響を受けるだけでなく、他の空間の文脈からの影響も同時に受け、また、他の空間の文脈に影響を及ぼしうる性質を指す。多重文脈性をまとう行為は、リアルタイムのコミュニケーションを今いる空間以外の場所の誰かと行うことを志向していることと、自らの身体がまさにその場所に確かに顕在していることの2つを強調する。この用法は、周囲に対して自身の存在に対する認知と敬意を要求しているとも言えるだろう。この行為の目的は、用法bのような、身体の不在、あるいは透明化を志向する利用法とは明らかに異なる。ただし、周囲の人々に、ケータイを利用可能であることが伝わりさえすれば目的は達成されるため、実際に繋がっていたり、外部連絡を行う必要はなく、そうしているかのように周囲に映れば事足りる。「まとう」の表現は、フェイクとして用いられ得ることを含意している[3]。

4. 調査概要

文献[3]の2つ目の調査の規模を拡大して、Web調査を行った。質問文を呈示して、公共空間における場面を想定してもらうところまでは文献[3]と共通しているが、回答の方法を変更した。文献[3]の調査では、様々な小物やその場で可能な行為（「寝る」や「何もしない」を含む）を選択肢として呈示して、そこで何を選ぶかを被験者に求めたが、今回は、ケータイのディスプレイを見る行為をしたくなるかどうかを、その欲求の強弱をつけて答えてもらう方法を採用した。

調査の遂行についてはNTT レゾナントが行う goo リサーチを活用した。時期は2008年9月3日より開始し、9月5日に終了した。調査開始日、同社に登録するリサーチモニターにアンケート本文を電子メールにて送信し、約30円相当の謝礼(会員ポイント供与)を支払う条件で回答を依頼した。リサーチモニターは携帯電話所有者に限定した。上記の期間中に、531人のリサーチモニターから回答を得た(回答してくれたリサーチモニターを、以降、被験者と記述する)。被験者の属性をテレビ視聴率集計区分で分けると以下ようになる。

M1層(男性、20-34歳) : 89名	F1層(女性、20-34歳) : 90名	計179名
M2層(男性、35-49歳) : 113名	F2層(女性、35-49歳) : 101名	計214名
M3層(男性、50歳以上) : 66名	F3層(女性、50歳以上) : 72名	計138名

男性の総数は268名、女性の総数は263名である。被験者には合わせて249の様々な質問を行ったが、本稿では、以下の設問12問と被験者の属性(年齢層別・男女別)を取り上げる。12個の設問は、ダミーの問題と共にランダムな順序で提示した。

被験者には、「用もないのに」ケータイを用いる場面と「用があって」ケータイを用いる場面を以下のように具体的に例示して、「用もないのに」ケータイを利用する経験を尋ねることを説明した。以下に、実際に被験者への説明に用いた「用もないのに」ケータイを自発的に取り出す具体例と用があってケータイを取り出す具体例を挙げておく。

【特に「用もないのに」ケータイを自発的に取り出す行動の例】

- ・時刻の確認
- ・着信(メール含む)の有無のチェック
- ・既読メール等の閲覧
- ・スケジュールの確認

- ・ゲーム、音楽プレーヤー利用 等

【用があってケータイを開く行動の例】

- ・呼び出し音やバイブレーター振動を感知してケータイを見る
- ・アラームが鳴ってケータイを見る
- ・突然所用を思い出してメールする
- ・今すぐみたいページがあるのでブラウザを開く

ここで、「用がある」とは、ケータイのコミュニケーション機能を即座に必要としていることを意味し、「用もないのに」とは、その場ですぐにケータイを用いる緊急性が乏しい事態を指している。

被験者に対して、設問に述べるような状況に置かれた場合（経験が無い場合は想像してもらい）、その状況を乗り切るために、つい「用もないのに」ケータイを取り出してしまいたくなるかどうかを尋ねた。設問に述べるような状況に置かれた場合に、ケータイを強く取り出したい欲求に駆られるならば5点、ほとんど取り出さないのであれば1点として、その中間的な欲求の度合いをそれぞれ、4, 3, 2点として、量的に回答してもらった。

12個の設問で用いた場面は、文献[2]において被験者達に自由記述で尋ねた「用もないのに」ケータイのディスプレイを見たくなくなった具体的場面の回答に基づいて構成している。公共空間に一人で居て、一般的に気まずく、居心地の悪いような典型的場面を取り出して文面を作成した。場面A1-A4の4つの設問は、文面が若干異なるものの、文献[3]で用いた調査文面と同様の場面を用いている。残りの設問も含め、公共空間において共に行動する家族や友人がなく、かつ、多くの他人と共に居合わせるような場面のみを集中的に取り上げている。比較を行いやすくするため、各場面で本人が行う最も基本的な動作に準じて12個の設問を、大きく3つに分類する。基本となる動作を元にして、それぞれ、共在行動A：「一人で待つ」、共在行動B：「一人で公共交通機関(主に電車)に乗る」、共在行動C：「一人で歩く」と表す。設問の分類と具体的文言は以下の通りである。

共在行動A：「一人で待つ」

- A1. 人通りの多い待ち合わせ場所で、友達を一人で待っている場面
- A2. 一人で市役所や役場にでかけた時、窓口前で込み合った座席で待っている場面
- A3. 講演会場（講義室）に一人でやってきて、周囲に話せる知り合いが居ないまま、講演（講義）が始まるのを待っている場面
- A4. 一人で飲食店に入ると、知らない人とテーブル席で相席にされた場面

共在行動B：「一人で公共交通機関(主に電車)に乗る」

- B1. 一人で電車に乗って座っているとき、不審者っぽい人がこちらを見ている場面
- B2. 一人で電車に乗っていると、あまり親しくなかった昔の友人が近くにいる場面
- B3. 一人で満員電車に乗ったとき、知らない人たちがすぐ近くに居る場面
- B4. 一人で電車に座っていると、お年寄りが近くに居るが、でも座席を譲りたくない場面

共在行動C：「一人で歩く」

- C1. 人通りの少ない夜道を一人で歩いている場面
- C2. 一人で歩いているときに、チラシ配りやティッシュ配りを拒否したい場面
- C3. 自転車置き場で自転車が倒れる場面に出くわしたが、一人で先を急いでいる場面
- C4. 一人で歩いているときに、顔だけ知っている人とすれちがう場面

なお、これら3つの共在行動を代表する表現「待つ」「電車に乗る」「歩く」は、文献[10]で報告されている「ケータイを最も利用する場面」アンケートで上位にランクされる場面の表現の中に表れている行動である。各設問の質問文が示す状況は、これまでの学生調査から自由回答で記されたものに基づいて構成したものであり、公共空間における一人の行動の全貌を代表するようなものとは言えないが、公共空間で行う行動の相応の割合を占めていると考えられるため、典型的なケーススタディとして、調査と考察を進めてゆく。

5. 共在行動ごとの傾向

各設問に対する全ユーザの「用もないのに」ケータイを利用したくなる欲求の平均値を図1に呈示する。

5.1 「一人で待つ」場合

共在行動 A: 「一人で待つ」場面では、ケータイを利用しやすいような安定した姿勢をとって、ケータイの操作を行いやすい。待つ間は、暇つぶしが必要なほど、退屈なことが多い。周囲の人との干渉も起こさないようにしたい人も少なからず居ると考えられる。これらのことは、4つの場面に共通するだろう。また、周囲の人と発生する「対面的かかわり」(注2)に対して、警戒心を持って対応しようとする人も相応に居ると考えられる。

各設問で被験者が答えたケータイ利用の欲求の強さの差をU-検定(棄却率 0.05)で調べたところ、A1-A2 間、A1-A3 間、A1-A4 間がそれぞれ有意な分布の差が検出されたが、A2-A3 間、A2-A4 間、A3-A4 間では有意差が検出されなかった。つまり、場面 A1 の場合が、他の場面に比べて、よりケータイが取り出される頻度が高くなることが示されている。

待ち合わせの場面では、知らない人に声をかけられて対面的かかわりが発生してしまうと、その対面的かかわりを任意のタイミングで打ち切ることが容易ではない。待ち合わせ相手が来ない限り、その場から去ることが出来ないためである。よって、予め対面的かかわりが起きないように、また、例え起きたとしても先約があるが故に任意のタイミングで会話を打ち切ることができるように、自らがケータイを利用する姿を通して、自分の社会性や人間関係の存在をアピールしておくことが有効になると考えられる。場面 A1 では、ケータイのディスプレイを見る行為を用いて、多重文脈性をまとうことで、自らが待ち合わせ中であることを周囲に無言で告げることが多いと考えられる[3]。

場面 A2、A4 に示された状況では、退屈で周囲の人との干渉を避けたい欲求が大きいと考えられる一方で、対面的かかわりに対する警戒心を強く持つ必要はない。役所の窓口で待つにせよ、食事を待つにせよ、各人の所用は順番に行われていくため、周囲の人と対面的かかわりが発生したとしても、所用が済んだ時点で確実にそれを解消することが可能であるからである。つまり、場面 A1 が場面 A2 や A4 に比べて、「用もないのに」ケータイを使用したくなる割合が高くなるのは、退屈であることや周囲の人との干渉への警戒心から感じるケータイの必要性に加えて、多重文脈性をまとう欲求を強く感じるかどうかが要因になっていると推察することができる [3]。

場面 A3 も、ケータイを利用することで、周囲の人との対面的かかわりの発生を防ぐために利用することが予想されるが、本調査では、場面 A2、A4 との有意な差が検出されなかった。文献[3]では、大学生(18 歳から 22 歳)を被験者に用いたが、本稿の調査は、20 歳以上の全世代を被験者としたため、場面 A2、A4 との差が発生しにくいことが示された。なお、大学生の世代が重なる 20 歳-24 歳までの被験者の回答の平均値を比較すると、場面 A3 のケータイ利用欲求の平均値は高くなる (A1:約 4.4、A2:約 3.9、A3:約 4.1、A4:約 3.9)。大学生は、講義や講演の受講を繰り返す毎日を過ごしているため、大学キャンパス外の一般的な公共空間とは異なる環境にあると考えられる。大学生の「用もないのに」ケータイ利用と、大学外での場面 A3 のような状況でのケータイ利用についての調査は今後の課題である。

5.2 「一人で公共交通機関(主に電車)に乗る」場合

「一人で公共交通機関(主に電車)に乗る」ような場面でも、ケータイを操作すること自体は容易であり、また、多くの場合、等しく退屈であることは議論するまでもなく、4つの場面で共通するだろう。電車などの公共交通機関では、ある一定時間が経過すれば、その乗り物から立ち去ることが出来るので、車内で「対面的かかわり」が発生したとしても、いずれは解消されるのがほとんどである。電車内では、多重文脈性をまとう使い方を必要性は「一人で待つ」ような状況と比べれば、大きくない。よって、共在行動 B の各場面における「用もないのに」ケータイを用いたくなる欲求の差は、周囲と干渉する気がないことをアピールするためにケータイを使いいたくなる状況であるかどうかを要因になっていると推測できる。

共在行動 B のケータイ利用の欲求の強さの差をU-検定(棄却率 0.05)で調べたところ、B1-B3、B1-B4、B2-B3、B2-B4 間に有意な差が検出され、B1-B2 間、B3-B4 間では有意な差が検出されなかった。設問 B1、B2 で示される状況は、B3、B4 に比べて、「用もないのに」ケータイを利用したくなる欲求が高いことが示されている。

設問 B1、B2 の文面が示す状況は、車内の特定の人との接触や干渉を避けたいような状況である。つまり、特

定のある方向に対して、自分の視線を向けないようにする必要がある。コミュニケーション研究において、視線を向けることは、その相手とのコミュニケーション回路を開くサインと受け取られることが多いため、会話を始める気の無い場合には、むやみに視線を向けないようにするべきであるとされている[9, 11]。ケータイのディスプレイを見ることで、会話や干渉を避けたい相手の居る方向に視線をやらないようにすることが、設問 B1、B2 に置かれた状況乗り越えるために有効であると考えられる。

設問 B3 のケータイ利用意向は、設問 B1、B2 と比べて明瞭に低い。設問 B3 の文面が示す状況は、退屈で居心地は良くないが、特定の方向に視線をやらないようにすることを優先的に行動する必要は、設問 B1、B2 の状況に比べて小さいだろう。また、設問 B4 の文面が示す状況では、一般的に見て非道徳的な状況であり、近くのお年寄りの視線を防ぐことが出来たととしても、周囲の人からの不評を交えた視線を回避できるわけではない。よって、ケータイの方を見て、お年寄りの視線を避けることができても、非道徳的な行為を周囲から覆い隠せるわけではない。設問 B4 の状況では、ケータイのディスプレイを見る行為がその場を乗り越えるための有効な手段とはならないことが推測される。

以上より、「一人で公共交通機関(主に電車)に乗る」場面では、「用もないのに」ケータイを取り出す行為は、退屈さに加えて、周囲の状況に応じて接触や干渉を避けようとする欲求の強さに影響されることが示される。その一方で、不特定の周囲の人々に視線を向けないようにするため、あるいは自らの不道徳さを隠蔽するためには、ケータイはあまり利用されていない。このことは、公共交通機関内で交わされている無言のコミュニケーションの様態を示唆的に示している。ユーザ(ここでは乗客)は、周囲から干渉を避けようとしながらも、周囲からの視線を完全に遮断できるわけではない。また、ユーザは、状況を観察しながら、その場に適応し続けようとしていることが示される。公共交通機関は、非言語行動を行い、その意図を汲んで貰うことが必要な空間であり、ケータイのディスプレイを見る行為がそこに適応しているとも言えるだろう。

但し、ここでの調査は、電車内の状況だけを想定しており、船舶や航空機などの、長時間密室状態が続くような交通機関特有の状況は除外している。今後は、このような空間も調査対象にする必要がある。

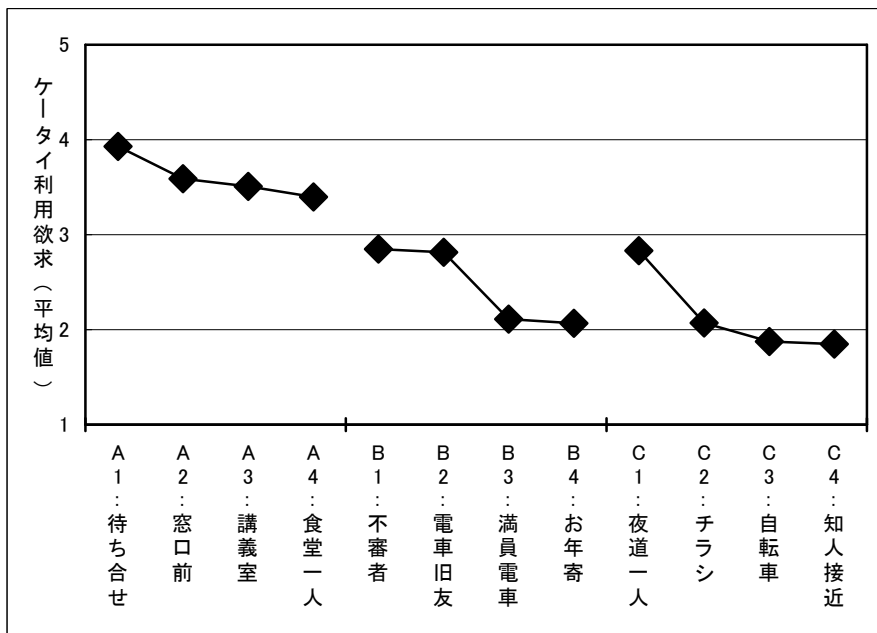


図 1: 共在行動(A, B, C)における「用もないのに」ケータイ利用

5.3 「一人で歩く」場合

歩行中のケータイ操作は、使いやすい姿勢にはないし、安全でもない。また、一人で歩く場合は、どうしてもケータイが必要なほど退屈なことはまれであろう。退屈さを紛らわす必要性があまりないことから、4つの場面

は、用法 a の要因を除外して比較可能になる。「周囲との干渉を避ける」必要性、あるいは「多重文脈性をまとう」必要性とケータイ利用との対応が明瞭になりやすくなることが期待できる。

共在行動 C の各設問で計量されたケータイ利用の欲求の強さの差を U 検定 (棄却率 0.05) で調べたところ、共在行動 C の中では、C1-C2 間、C1-C3 間、C1-C4 間、C2-C3 間、C2-C4 間に有意差が検出されたが、C3-C4 間のみ、有意差が見られなかった。

場面 C1 では、夜道の危険性を承知した上で、そこを通らざるを得ないユーザが、周囲に対して、いつでも外部に連絡可能であることを誇示する狙いがあると考えられる。これは、ユーザが多重文脈性をまとうためにケータイを利用することが有効な例である。場面 C2 では、歩いている以上、自らの存在を隠すことは適わないものの、ほんの数秒で対面的かかわりが終了するチラシ配りやティッシュ配りが相手の場合は、多重文脈性をまとうような必要はないだろう。場面 C3 では、助けたり手伝ったりすることが一般的に推奨されるような場面であるため、そこをそのまま歩いて通りすぎることは、周囲からの不評を受けるような状況である。このような状況を乗り切るためのツールとして、ケータイのディスプレイを見る行為はほとんど有効とされていないことを図 1 の結果は示している。場面 C4 は、特定の知人を避けたい状況という点では、場面 B2 と類似している。しかし、歩いている以上、自らの存在を隠すことは適わないし、ケータイのディスプレイを見る行為は有効とは感知されていないことが推察される (場面 C4 と B2 間には、棄却率 0.05 の U 検定で有意差が検出される)。

5.4 ケータイのある公共空間

共在行動 A: 「一人で待つ」と共在行動 C: 「一人で歩く」においては、待ち合わせや夜道を一人で歩くような場面で、ケータイの利用欲求が高くなった。3 章で述べた用法 c、すなわち多重文脈性をまとうことは、ケータイが通信機能を持っており、またそのことを周囲のほとんどの人が知っているが故に実現可能である。ケータイを用いて、無言で、かつ、瞬間的に多重文脈性をまとう用法は、ケータイ端末の急速な普及と共に、短期間の間に広く全ユーザにもたらされた権能である。待ち合わせや夜道を一人で歩くような際に、多重文脈性をまといたくする需要は、以前から存在していたと考えられる。ケータイはそれらの需要に対して、「静かに」応えている。

共在行動 B: 「一人で公共交通機関 (主に電車) に乗る」においては、電車内に不審者が居る場合や、仲の良くなかった旧友が居る場合の 2 つの場面で、ケータイの利用欲求が高くなった。この結果は、「ケータイのディスプレイを見る行為」は、不特定の他人を避けるより、特定の方向に居る特定の他人との視線のやりとりを避けるために使われやすいことを示している。ケータイを利用することによって、周囲の人達と「相互作用を行わないことに積極的」である場合には、そのアピールは特定の方向に向けられていることが多いと推論できる。このような、周囲との干渉を避けるために携帯可能な小物を用いる行為は、既に遙か以前から行われてきていると考えられ、それらがケータイに置き換わったと推察できる。手のひらにおさまるケータイが高機能化していく過程で、このことは当然の流れと言えるだろう。

非言語行動としてのケータイのディスプレイを見る行為は、新しい役割を担いながら、古くからの小物が果たした機能を代替しつつ、拡充している。ケータイは、通信機能とその他の機能の便利さから急速に普及したが、それと同時に、公共空間に新しい非言語行動を広くもたらしている。

6. 年齢層別、男女別傾向

6.1 年齢層別傾向

本節では世代別の傾向を捉える。世代の分割はテレビ視聴率集計で行われる M1・F1 層～M3・F3 層の年齢層の区分を用いた。この区分はテレビ視聴率のみならず、マーケティング調査や広告効果測定などでも広く使われている。また、20 歳以上の世代を大きく 3 分割することができるため、全体的傾向の俯瞰が容易になる。

設問 A1-C4 に対する各層のケータイ使用欲求の強さを図 2 に示す。また、各の設問における各年齢層間の欲求度合いの有意差 (U 検定、閾値 0.05) の有無を表 1 に示す (○が有意差有り、×が有意差無し、以降同様)。さらに、各層において前後する (順序は全体平均値の降順である) 設問間の欲求度合いの有意差の有無を表 2 に示す。

図 2 のグラフを見てやると、各設問に対するユーザの答えの平均値は、M1+F1 層が最も高く、M3+F3 層が最も

低い。また、大まかな傾向ではあるが、各設問に対するユーザの答えの平均値は、それぞれの年齢層内において、同様の増減傾向を示している。

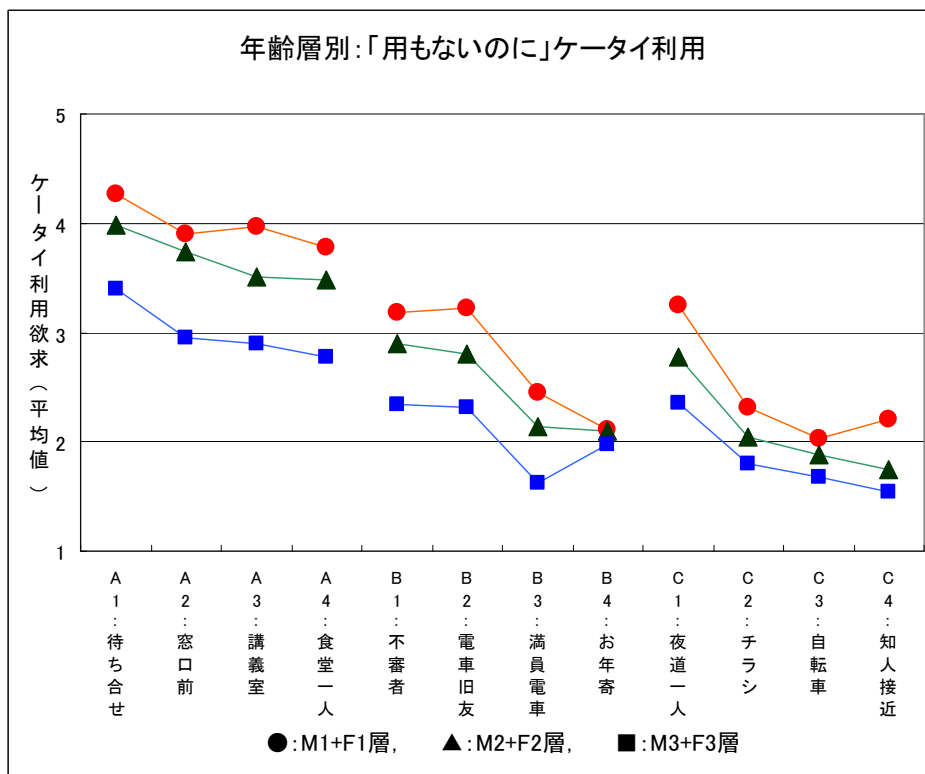


図2: 年齢層別「用もないのに」ケータイ利用

	A1	A2	A3	A4	B1	B2	B3	B4	C1	C2	C3	C4
(M1+F1層)-(M2+F2層)間の差	○	×	○	○	○	○	○	×	○	×	×	○
(M2+F2層)-(M3+F3層)間の差	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○

表1: 各設問における年齢層間のケータイ利用比較

	A1-A2間	A2-A3間	A3-A4間	B1-B2間	B2-B3間	B3-B4間	C1-C2間	C2-C3間	C3-C4間
全体	○	×	×	×	○	×	○	○	×
M1+F1層	○	×	×	×	○	○	○	×	×
M2+F2層	○	×	×	×	○	×	○	×	×
M3+F3層	○	×	×	×	○	○	○	×	×

表2: 各設問間のケータイ利用比較

表1において、設問B4を除いた全ての設問で、(M1+F1層)-(M2+F2層)間と(M2+F2層)-(M3+F3層)間の両方あるいは片方で有意差が検出されている(設問B4が示す状況は、年齢差を比較すること自体が不向きである)。このことは、年齢が若いほど、「用もないのに」ケータイを取り出す欲求やその頻度が高いことを示している。ただし、M3+F3層のユーザも、相応の頻度で「用もないのに」ケータイを利用していることを伺わせる。

表2において、設問B3-B4間、C2-C3間では、各年齢層間で有意差の有無が異なるものの、他の設問間では、各年齢層の間で、有意差の有無が一致することを示している。このことは、各年齢層内でのユーザの答えの平均値の増減傾向が概ね共通している事を示している。つまり、「用もないのに」ケータイを利用する欲求の強さは、全般的な強弱の差はあっても、各年齢層ごとに、概ね同様の傾向があることが示される。このことは、M3+F3層のユーザにおいても、他の年齢層と同様に、公共空間における気まずさを感じていること、そして彼(女)らもケ

ータイを使って、その状況を解決・調整しようとするのを、相応の頻度で行っていることを示している。

6.2 男女別傾向

男女別のケータイ利用欲求の強さを図3に表示する。また、各の設問における男女別の欲求度合いの有意差(U-検定、閾値0.05)の有無を表3に示す。男女別の比較では、A3、A4、B1、B2、C1、C2の6つの設問で有意差が検出された。このうち、閾値0.01で検出した場合にも有意差が検出された設問は、A4、B1、B2、C1の4問である。

いくつかの特徴的な設問において、女性の利用意向が高かった。女性は、特定の場面で「用もないのに」ケータイのディスプレイを見たいくなる必要性をより強く感じる傾向があることをこの結果は示している。

とりわけ、設問B1やC1のような場面は、女性にとってリスクな状況にありながら、そのリスクが表面上は未遂のままであるが故に、はっきりとした対応をとりづらい。設問B1の場面では、不審者らしき人の居る特定の方向からの視線を確実に避けて、対面的かかわりの糸口を作らないようにする必要がある。設問C1の場面では、誰かと繋がっている様子を演出する、すなわち多重文脈性をまとうことで周囲を間接的に威嚇する必要がある。このような場面で、顕著に男女差が表れている。このことは、女性が公共空間で不利な立場にあることを示すと共に、ケータイが公共空間の女性にとって、有益なツールとなっていることを伺わせる。

A3、A4、B2、C2とも、女性にとって、格別にリスクな状況ではないものの、他人の視線を避ける必要がある。このような状況で、あからさまな態度をとることなく、間接的に関わりを拒否することをケータイのディスプレイを見る行為は実現可能である。このような機能に対して、女性が大きく期待していることを推測させる。

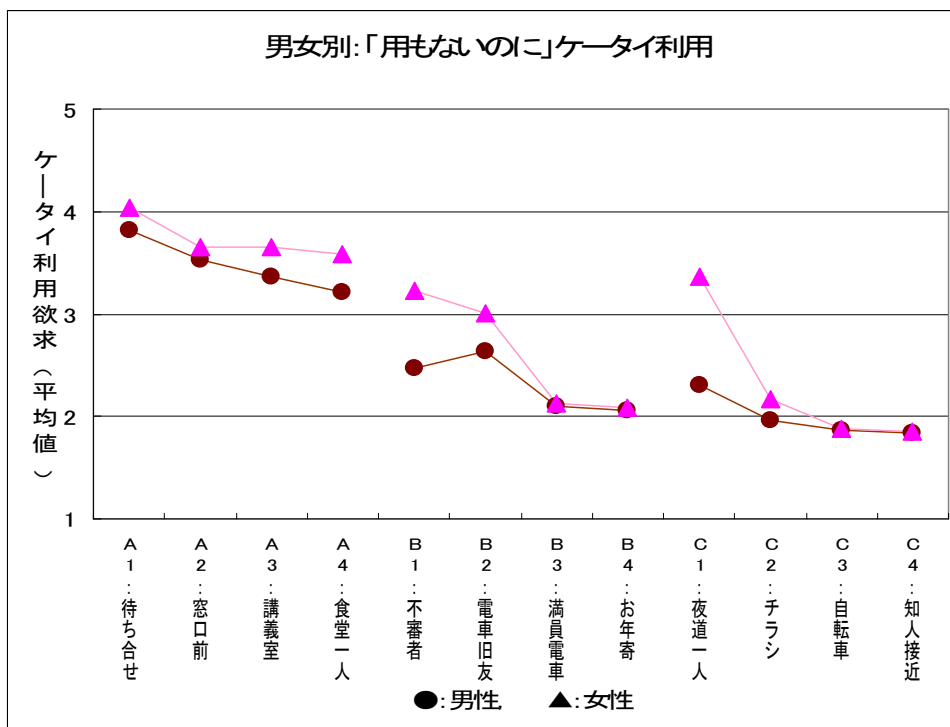


図3: 男女別「用もないのに」ケータイ利用

	A1	A2	A3	A4	B1	B2	B3	B4	C1	C2	C3	C4
男女差	×	×	○	○	○	○	×	×	○	○	×	×

表3: 各設問における男女別のケータイ利用比較

6.3 属性による利用傾向の考察

本章では、「用もないのに」ケータイ利用について、被験者の年齢層別、男女別という属性に基づいて、その使用傾向を比較した。年齢については、ユーザが若いほど、ケータイの利用欲求が高くなることが示されたが、各設問の利用意向は、各年齢層において、同様の傾向があることが示された。M3+F3層に属するような年配のユーザ達も、公共空間に居る際に、状況に応じて「用もないのに」ケータイのディスプレイを見る行為を意図的に行うことを示している。ケータイの通信機能（通話・メール・コンテンツ利用）を利用する頻度は、若いユーザが年配のユーザよりも高い[10]とされ、若者はケータイをより使いこなしているというのが、一般的なイメージである。このことは、年配のユーザはケータイ利用に不得手で縁遠いことを推測させるかのようなものである。しかし、本調査の結果は、年配のユーザも、若いユーザ達と同様に、公共空間における気まずさや居心地の悪さを感じ、それに応じてケータイを利用して、その状況を調整する役割をケータイに託していることを示している。

男女差については、特定の設問が示す場面において、女性の利用意向が明瞭に大きくなることが示された。このことは、女性にとっての特有の気まずさ、居心地の悪さを感じやすい場面、あるいはリスクな場面が、公共空間において日常的に頻発していることを推測させる。女性は、公共空間で不快な状況に頻繁に遭遇するが、多くの場合、女性はそれらの状況に無言で対応することを迫られている[12]。ケータイのディスプレイを見る行為は、無言でありながら、多重文脈性をまとうたり、周囲との干渉を回避したりできるため、女性特有の不快な状況への対応の幾ばくかを支援しているとも考えられる。

7. まとめ

本稿では、ケータイのディスプレイを見る行為について、調査会社を活用して全国的に行った調査結果の報告と考察を行った。予備的調査で得られた気まずい場面例を用いて、「用もないのに」ケータイを取り出したくなる欲求の強さをアンケートで答えて貰い、3つの用法と目的を参照して分析を行った。

調査の規模を拡げても、多重文脈性をまとうこと、つまり自らの社会性や人間関係をアピールすることが必要な場面で、「用もないのに」ケータイを利用する欲求は高かった。また、一人で公共交通機関(主に電車)に乗るような場面においては、特定の方向からの視線のやりとりを避けることが必要な場面でケータイ利用の欲求が高くなった。状況における必要性に応じて、ケータイの利用欲求が高くなることは、多くの人が公共空間において何らかの対応を用いて乗り切らねばならないような気まずさ、居心地の悪さを感じていること、ケータイがそれらの状況を調節するためのツールとして利用されていることを示している。ただし、いくら気まずくても、明らかに非道徳性をごまかすような行動には、ケータイのディスプレイを見る行為は、ほとんど役に立たないであろうことも被験者のアンケート結果は示しており、ケータイ利用が効果的であるのは、限定的な状況下であることを伺わせる。また、講演会場(講義室)に一人でやってきて、周囲に話せる知り合いが居ないまま、講演(講義)が始まるのを待っている場面では、以前に行った大学生に対する調査において高い利用意向が示されたが、今回の一般的な調査では、利用意向が高くなかった。大学生と一般の人では、講義に日常的に接する頻度が大きく異なるため、これらの結果を踏まえ、さらに詳しく調査、考察する必要がある。

被験者の属性(年齢・男女別)と「用もないのに」ケータイの利用意向との対応も併せて分析した。ほとんどの設問において、年齢が上がるにつれ、ケータイの利用意向は減少しているが、一方で、各設問に対する利用傾向そのものは、若いユーザも年配のユーザも同様であった。一般に、ケータイ利用に不得手で縁遠いかのような印象をもたれる年配の人たちも、若いユーザと同じように、ケータイのディスプレイを見る行為を非言語行動として利用している姿を本調査は示している。女性のユーザは、女性特有のリスクや気まずさに対応する必要がある場面や、周囲からの干渉を無言で拒否する必要がある場面で、高いケータイ利用意向がある。公共空間は、「公共的」とは云うものの、女性にとって、不利で不快な状況が起こりやすい空間であると指摘されており、さらに、公共空間で避けるべき状況に対して、女性は無言で対応することを迫られていると言って良いだろう[12]。このような立場にある女性に対して、ケータイは、その需要に適応した非言語行動を支援していると言える。ケータイが女性に親和性が高いことは、多くのデータが指摘しているところである。その原因の一つとして、公共空間で起こる女性特有の状況を乗り切るためのツールとしての有用性が挙げられる可能性を本調査は示唆している。

公共空間は、ケータイを「用もないのに」使いたくなるような状況が頻発する空間である。ケータイを利用した非言語行動を通して、人々がメッセージのやりとりを行っているならば、この行為は非言語コミュニケーションとして、広く普及しつつあると推測できる。1990年代のケータイ端末普及期には、公共の場における通話マ

ナーの問題が多く取り上げられた([5])が、その時代を超えた2000年代において、公共空間は、ケータイのディスプレイを見る行為による非言語コミュニケーションが頻繁に行き交う空間に変貌したと言っても良いだろう。公共空間とは、ケータイ端末の遠隔通信機能やマルチメディア機能とは別の使い方である「ケータイのディスプレイを見る行為」を必要とする空間だったのだ。ケータイのディスプレイを見る行為を理解することが、公共空間のあり方を見つめ直す契機となりうるだろう。今後、公共空間の「公共性」を再考するとともに、ケータイという情報通信端末が我々の社会に及ぼす影響を改めて理解する必要があると考える。

また、公共的な場面のみならず、家族や友人などの親しい者と共にいるようなプライベートな場面においても、ケータイのディスプレイを見る行為は多発しているといつて良い[13]。親しい者と交わすコミュニケーションにおけるこの行為の果たす役割や効果も、今後の考察の視野に入れていくべきであろう。

本研究は日本学術振興会科学研究費、基盤研究C：「ケータイのディスプレイを見る行為」における非言語コミュニケーションの役割調査」の助成金を活用して行った。

参考文献

- [1] タークル, S. : 「技術を本来の役割に」(前編), 未来心理, vol. 001, pp. 6-17, 2005.
- [2] 中村隆志: “非言語コミュニケーションとしての「ケータイのディスプレイを見る行為」”, 情報文化学会誌, 14(1), pp. 31-38, 2007.
- [3] 中村隆志: “多重文脈性をまとうツールとしてのケータイ”, 情報文化学会誌, 15(1), pp. 12-19, 2008.
- [4] 電気通信事業者協会HP, <http://www.tca.or.jp/japan/database/daisu/index.html>.
- [5] 岡田美佐: 「ケータイをめぐる言説」, 松田美佐, 岡部大介, 伊藤瑞子編, 『ケータイのある風景』北大路書房, pp. 1-24, 2006.
- [6] “ケータイとライフスタイル～ケータイユーザー意識調査～”(2008年1月22日), ネットエイジア, http://www.mobile-research.jp/investigation/research_date_080122.html.
- [7] “今年1年で最も利用した携帯の機能は「メール」5割半、「音声通話」2割強”(2008年12月22日), アイシェア rTYPE リサーチ, <http://release.center.jp/2008/12/2202.html>.
- [8] 総務省: 携帯電話の番号ポータビリティ広報サイト, http://www.soumu.go.jp/joho_tsusin/mnp/.
- [9] E. ゴフマン: 『集まりの構造』(丸木恵祐子・本名信行訳), 誠信書房, 東京, 1980.
- [10] モバイル社会研究所: 『モバイル社会白書2007』, NTT出版, 東京, 2007.
- [11] ケンドン, A., ファーバー, A., : 「人間の挨拶行動」(佐藤和久訳), 菅原和孝, 野村雅一編『コミュニケーションとしての身体』大修館書店, pp. 136-188, 1996.
- [12] 安川一: 「〈共在〉というポルノグラフィ」 安川一編『ゴフマン世界の再構成』世界思想社, pp. 185-210, 1991.
- [13] 中村隆志: “親しい者で行う非言語コミュニケーション「ケータイのディスプレイを見る行為」とその多様化”, 情報コミュニケーション学会誌, Vol. 4. No. 1&2, 2008.
- [14] V. P. リッチモンド, J. C. マクロスキー: 『非言語行動の心理学』(山下耕二: 編訳), 北大路書房, 2006.
- [15] 佐藤綾子: 『非言語的パフォーマンス』, 東信堂, 2003.

注

- 1) 本稿では「非言語」は、文字や音声を用いないノンバーバルなやりとりのことを指している。また、「非言語行動」とは、メッセージを伝える意図があるかどうかに関わらず、誰かが他者と共に居る空間で、非言語的に行う行動そのものを指す。「非言語コミュニケーション」とは、メッセージを伝える意図があるかどうかに関わらずなされた誰かの非言語行動が、その場に居合わせるだれかに何らかのメッセージを伝えた場合、それが誤解を含んでいる場合を含め、その非言語行動と伝達された意味を合わせて非言語コミュニケーションと呼ぶ(文献[14-15])。以降同様。
- 2) ゴフマン(E. Goffman)は、同じ空間に居合わせた二人(あるいは、二人以上の人々)がお互いに一緒になって単一の相互行為(例えば、世間話、食事、ある種のゲームなど)を行うようになり、それを維持しようすることを「対面的かかわり」(あるいは「出会い」と呼ぶ。一般に人々は対面的かかわりを求めていると同時に用心深くもある(文献[9])。